
東方紅狼録

鳳燕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方紅狼録

【Nコード】

N0801Z

【作者名】

鳳燕

【あらすじ】

紅狼 葉月は理由が分からず死んでしまった――
そこで転生することになり――

プロローグ（前書き）

プロローグですね

これから私、鳳燕と小説を宜しくお願いします。

プロローグ

初めまして普通？の高校生男児の紅狼^{こうろう} 葉月^{はつき}と言つもの。

……突然じゃが僕は非常に困つた状況に陥っているのじゃ。
それは何か？それはじゃのう……

「此処は何処じゃー！」

一面真っ白の壁も天井も何にも仕切りのない部屋？というべきじゃ
ろうか……そんな場所にいるんじゃないこれが……

「ぬぬう、何故このような奇怪な場所にいるのじゃ、僕は……」

考えても可笑しいのじゃよ、僕は家で寝ていたしのうこんな場所父
上と来たこともない、しかも何故か記憶が抜けた様に変な気分じゃ
し……

「考えても仕方ないのう、やることがないし寝るとするかのを」

うむ、眠くなってきたしこれが最善の策じゃしのう。

「ふああ、お休み……」『つて寝ないでくれない？』？」

誰じゃ、人の眠りを妨げる愚か者はいいい迷惑じゃ。

『愚か者つてひどいなあー、僕は君に話があるから話かけたのに』

「じゃあ、僕が寝終わった後でよからうにそれに貴様は誰じゃ？」

『一刻を争うから君を起こしたんだよ、ていうか今誰か聞くのかい』

「？」

むぐぐ、こつも綺麗にかえされたのは初めてじゃが何故かこの者には、名を聞いてはいけない気がする……『まあ、僕に名を聞いてはいけないというのは感心するよ。じゃあ話に移ろつか？』

「やはりのう、じゃが何者かぐらいは話してくれても……まあ、よい早く話をしてくれないか？」

むむむ、全てを見透かされている様な気がして気持ち悪いが、一刻を争う話か……聞いてみるのが良いかのう。

『さて、じゃあ葉月ちゃんも落ち着いたみたいだし手早く話すよ。まず君は……、死んだ』

この者今、何と言った？僕が「死んだ」？

訳が分からぬ、そしてこやつ僕の事を「ちゃん」付けしおった！

僕はれっきとした男なのに！

「そんな事より僕が死んだとはどういう事じゃ！僕は確かに生きているじゃろつか！」

僕は確かに存在していて言葉を目の前の者と交している、それが死んだ？冗談ではないわ！

『ああ、そつだ君は「確かに存在」して僕と話しているけどそれは「此処」だけであつて君の世界では死んでいる。それと僕は君に死んだとは言つても「完全」には言っていない。』

僕は確かに存在しているが此処だけであり、僕の世界では死んでい

る？

だが完全にはない？

どういう事じゃ……？『あはは、理解しないでいいよ。どうせ理解しても僕が、消す、から……』

この者の言葉一つ一つが恐ろしくて聞いていられぬ！
しかも声を出すこともできぬ……。

『そりやそうだよ、反論されたら僕からしたら堪ったもんじゃない。もう、いいかな？必要な話を話して君を送る事にする。』

何故この者は話す度に言葉の重みが強くなるのじゃ。
そして儂を何処に送る気じゃ！

『うるさいなあ、君は心の中でもお喋りなのかい？そろそろ心でも喋れないようにするよ……』

……分かった、黙って聞く事にする。

『いい子だねえ、もう時間もないし話だけだね。君を別の世界へと飛ばすよ、これは僕からの贈り物的な物だよ。理由は言及しないですよ』

言及は無しということは聞いたら問答無用で消すと取っても構わんのか……

『そうだね、だってそういうの煩くて仕方ないもん。特に強欲な人間とかはね……じゃあほら君も納得したみたいだし、次の話に移るよ』

僕は納得しておらんのだが、反論したら消されるからのう。

して次の話とは何じゃ？『次の話というものはね……その君が行く世界は危険だからね。少しばかりの特典を付けさせて貰うよ、けど付けるのは3つまでで強すぎても駄目だからね。じっくりと考えて』

特典ということは本当に危ない世界なんじゃな……

決めたのじゃ！

『へえ……早いねえ、じゃあ言ってみてよ』

うむ……。

まず一つ、前の体よりも強い個体そして身体能力。

二つ目、父上が使う全ての剣技、居合いの技。

三つ目は、努力することにより強くなる無貯蔵の強さ。
この三つなんじゃがどうじゃ？

『……少しだけ強欲だけどまあいいかな。それだけないと生きれないでしょ？しかも二つ目は君のお父さんの技……強くなるよ直ぐにね。』

さすがに父上の技は引き継ぎたいからのう、じゃが全て許可してくれた事に驚きな の じゃが。

『能力はあつちの世界で君が産まれたら付与しておくよ。じゃあも

「送るよ。」

え？ちよっ！待つのじゃ！まだ言いたいこと……

『じゃあね、彼処ではお幸せに。』

あの者の言葉と共に僕の視界は紅く染まった。

プロローグ（後書き）

どうでしたか？

感想等まっています

壱の心得ゝ状況を把握するのはとても大切な事じゃぞゝ（前書き）

BUNPさんのZEROを聞きながら執筆した1話ですよゝ

というか葉月を送りだした謎の人物の性格が考えていたものと違う
なあ

害の心得ゝ状況を把握するのはとても大切な事じゃぞゝ

狭い…狭いのじゃ……

そして息苦しい、というかまたまた言うが此処は何処なのじゃ！

痛っ！誰じゃ！儂の頭を引っ張っている奴は！

ちよっ！痛い痛い！

スポーン！

何かが爽快に抜け出る音がすると儂は狭い場所から解放された。
じゃがしかし一度目を開けば……

「グルルル……」

紅く染まった血のような毛の狼が此方を涎を垂らしながら見ていた……

冗談じゃないのじゃ！

また儂は死ぬのか！

「ワオン！（三十六計逃げるに然ず！）」

「グル！（あらあら元気な子ねえ……）」

ギュム……

うわあ！紅狼に踏まれたあ！此で儂の人生もお終いじゃ！

って……さっき儂の事を元気な子と言わなかったか？

……ということは今儂を踏んづけているこの紅い狼が新たな両親か

のう。

「グルルア……（ようやく大人しくなったわね、改めて初めまして私の可愛い娘）」

一瞬で体を反転され新たな僕の両親にご対面じゃ……。うむ、此方からも宜しく頼みますぞ母上。

ん？そういえば僕の事を「娘」と言わなかったかのう……もしかして

「ワオーン！（性別が反転しておるではないかあ！）」「グルル……（変な事を言う子ねえ、毛が紅いんだから雌に決まってるじゃない。）」

僕の顔を舐めながらも話してくる母さんじゃが、一瞬で変な子扱いされてさすがに心が折れそうじゃ。

ふむう、紅い毛じゃと雌なのか……まあそれよりも

「アオン！（母上エ！お腹が空いたのじゃあ！）」

腹が減っては戦はできぬう！僕は今にでも腹が減って倒れそうなのじゃあ！

「グルル（あらあらお腹が空いたの？それじゃあいっしょい、お乳を飲ませてあげる）」

……そうじゃったあ！狼でも最初は乳を飲むんじゃったな。

「グルア？（あら？どうしたのかしら？お腹が減っているんじゃない

いの？」

地面に寝転びながら儂に話掛けてくる母上だが、儂にとっては乳を吸うのには抵抗がある訳で思い切っていけないのじゃ……。

…… ああんもう！考えても仕方なかるうに！儂は腹が減っている、そして食い物は母上の母乳！それを恥じてどうするのじゃ！

「アオン！（今行きますのじゃ！）」

ダダッと駆けては目指すは母上の乳を……

そして着いた所で一気に母乳を飲むんじゃ！

…… 儂は変態か

「グルル（そんなにがつつかなくても誰も取らないわよ？沢山飲んで大きくなりなさい。）」

乳にがつつく儂を舐めながら優しく言う母上、じゃがそうは分かっているとしても変わる事がないのが人の性！

と、今は狼じゃったな。

「クルル（美味かったのじゃ、？母上何処に行くのじゃ？）」

「ガル（私もお腹が空いたのよ、すぐに戻ってくるから彼処の巣穴で待ってなさい）」

儂が腹が満たされた所で母上が立ち上がった、ふむうさすがに腹は誰でも減るのう……

それは仕方のないことじゃから大人しく母上に教えられた巣穴に行くとするかのう。

「グル（物分かりが良くて助かるわ、それじゃあ私は食事を取ってきたら戻るから……）」

「アオン！（分かりましたのじゃ！行つてらっしゃい！なのじゃ）」
のそのそと先が見えない森にへと向かう母上、それが凜々しいのじやよ。

さてさて母上が見えなくなったので巣穴に行くとするかのう。

「クルルル（ハア……しかし産まれたら狼とはのう、これでは前の世界での父上の技が使えないではないか……）」

——困っている様だねえ、葉月ちゃん？——

「ガル！？（またお主か！？次は儂に何の用じゃ！）」——警戒しないですよ、酷いなあ——

「ガア！（警戒するなと言うのが無理な事じゃ！しかもお主のせいで儂は女になつたじやろうが！）」

こやつ声を聞くだけで寒気がする、そして女になつたから余計に腹が立つのじゃ！

——アハハ、僕に暴言を吐くなんて無謀だなあ。せつかく君に大事な話を持ってきたのになあ——

「グルア！（ならばそれだけを話せ！儂はお主と関わりたくないの

じゃ！）」

声を聞くだけで吐き気がする、頭痛が酷くなる！
早く話して消えてくれなのじゃ！

——嫌われてるなあ、じゃあ話そうか！　君が頼んだ特典に問題が発生したから付与は100年後になるよ」けど、最初に頼んだ強い体はその君が入っている器だから心配しないでね。それじゃあね？
僕の玩具ちゃん——

そんな馬鹿な、百年も生き延びられる訳がなかつた！

だがあやつの声は儂の返答を待たずに儂の頭から消えていった。
最後に奇妙な言葉を残して……

「ウウ（気分がすごく悪いのじゃあ……もう眠くなってきたし寝るとしようかのう）」

巢穴に入り儂は母上の毛がしきつめられた暖かな空間で目を閉じ波乱の1日を終えた。

害の心得ゝ状況を把握するのはとても大切な事じゃぞゝ（後書き）

どうでしたかあ？

感想等々まっています

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0801z/>

東方紅狼録

2011年12月3日15時52分発行